

日本語版刊行によせて

“Survey Methodology”の日本語翻訳版に序文をよせる機会に恵まれたことを大変に光栄に思う。大隅昇氏ほかの研究者は、われわれが執筆した原著“Survey Methodology”を細心の注意を払って翻訳を進めてくれた。他の言語への翻訳も行われているようだが、私の知る限りでは本書が世界で初めて出版される翻訳本となる。

多くの翻訳書がそうであるように、この日本語版は原著を忠実に訳したものである。このことは、原著の中で述べられた手順や方法、紹介されている多くの事例は、原著者らの経験や調査方法論の研究成果を十分に反映しており、紛れもなく米国および西欧の研究の特色をそなえる書であることを意味している。このことはまた、本書の内容が、どのように日本の実情にあてはまるかを、読者が自らの判断で受け入れる必要があることを意味している。日本の調査研究をとりかこむ環境には、他の国々における調査研究のあり方と数多くの類似点があるが、一方では顕著な違いもある。このことは、日本のリサーチャーにとって、欧米の研究成果が日本の状況に当てはまることを学ぶ努力目標を設けることであり、また、日本の調査研究に適した最善の研究方法の探究を進めるための、またとない機会とすることを意味する。

この翻訳書が、日本における調査方法論研究の活性化に役立ってくれることを切望している。日本でもすでに多くのすばらしい研究がなされているのだが、それらが国際的な論文となることは比較的少ないようである。調査方法論の用語や手法を、日本のリサーチャーにとって、より身近なものとして共有化することで、本書が、日本からさらに多くの国際的な研究論文・成果が発信されるよう、後押しができれば幸いである。一方、世界の他の国々にとっては、日本の調査研究者から学ぶこともたくさんある。この翻訳書によって、多くの意見交換や共同研究が育まれることを強く願ってやまない。

この序文を贈る者として、日本における調査方法論について、さらに深く知ること、そして日本の実情と本書で述べたこととの類似や差異についてさらに学ぶことを、より一層期待して筆をおく。

2011年5月

原著者を代表して ミック P. クーパー (Mick P. Couper)
ミシガン大学 調査研究センター・教授
(Research Professors, SRC, the University of Michigan)